市民談話室

投稿ください　市民の皆さんの意見交換の場がこの市民談話室です。テーマは自由です。あなたの意見を気軽にお寄せください。採用文には薄謝を差し上げます。紙面の都合上、文を短くすることがあります。あて先は、大字白根一二三五　白根市役所企画財政課広報広聴係です。

運動会に思う

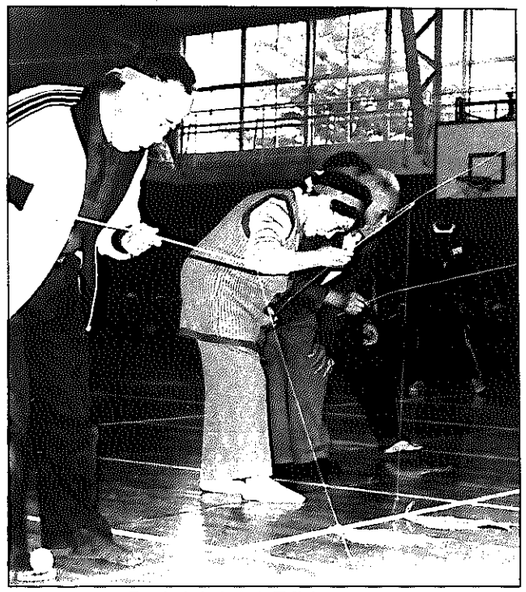
参加する歓びをより多くの人に

渡辺歌子さん（五六の町・主婦・60歳）

十月は運動会のシーズンです。私は、二日の市民運動会、二十三日の市老人運動会に参加しました。これらは、参加者と応援する者が一丸となって、歓声をあげて歓び合う最高のレクリエーションだと思います。

特に市老人運動会は、六十歳以上の明治、大正青年によるはつらつ運動会でした。紅白リレーなど八種目もあり、一同幼児にかえり、とても楽しく和やかな一日になりました。

ここに、健康で幸せに生きている歓びを感謝し、一年後の運動会には、もっともっと多くの方々が参加されるよう願ってやみません。



10月に行われた老人運動会から

交通事故に思う

子供にふりかかって知った恐しさ

小林豊子さん（新飯田・歯科技工士・29歳）

この間、ちょっとした不注意で子供を交通事故に合わせてしまいました。一瞬の出来事でした。もっと注意していたら、あのときもし手を離さなかったら…あんな事は起きなかったのに…と何度思ったことか。でも後の祭りです。

実際、けがはたいしたことにはつながりませんでしたが、一時はどうなることかと思ってゾーッとしました。本当に子供にはかわいそうなことをした、とつくづく反省しました。

事故はいつ起きるかわかりません。私自身、ふりかかってはじめて事故の恐ろしさを知った思いでした。今後、事故を起こさないためにも、十分注意していきたいと思いました。

社会参加

英知を磨き子供の鏡となる親に

西村スミさん（柳笥・農業・57歳）

「〇〇先生の講演です。多数の参加を」――だが、集まるメンバーはいつも同じ。また防犯懇談会でも、反抗期の子供を持つ親がもっと集まってくれればよいのにと、主催者は話される。

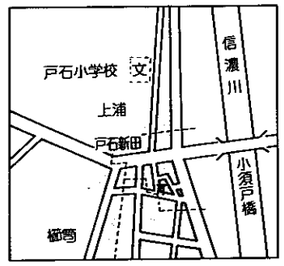
私たちは生活に追われてと言うが、子供の姿、行動さえ知らず、働いた金の行方は、いくら簡素化と呼びかけても人の言葉に惑わされ、自分の意思と関係のない方へ流れて行く。

激動する混住社会の中、少しでも時間を見いだして社会参加することにより、英知を磨き、心を開いて自分の道を歩むことができるのではないでしょうか。子供の鏡となる親に…。

ぼくたち わたしたちの部落・町内会

戸石新田

世帯数　73世帯
人口　390人（男187人　女203人）
（11月1日現在）



戸石小学校6年
武田倫子さん

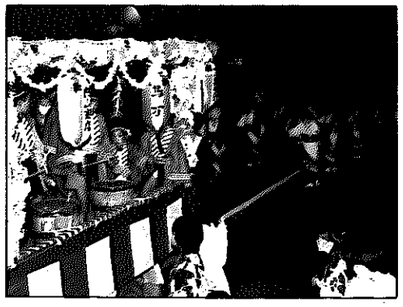
わたしたちの部落では、八月三十一日と九月一日にわたって、楽しいお祭りがあります。

八月三十一日の夜みやには、八時から、たるたたきをしたり、民ようながしをしたりします。たるたたきは、車にたるをのせ、五・六年生がたたきます。それにあわせて民ようながしが始まります。

民ようながしは、さどおけさや新潟じんくや、いろいろな音楽をながしながら、お宮に向かいます。

この日は、きれいな着物を着て、みんながおどります。おどりは十時半ごろまでつづきます。

こうして八月三十一日が終わって、九月一日には、おもちなどを作って、みんなで食べます。



空き缶の投げ捨て

捨て去る車「飲んだら捨てるな」

真柄ミイさん（鷲ノ木桜町・主婦・55歳）

信濃川堤防沿線に沿っている鷲ノ木桜公園の付近から、往復三十分くらいかかって、いつも犬をつれて散歩に行くのが、私の日課となっています。

その通る道に雪が降って、解け始めるころにそっと頭を出してくるのが空き缶で、赤、黄、茶色と、ころがっているのが目について驚いています。誰が捨てたのでしょうか。

子供のころは、雪が解ければ一番早く芽を出すのが、ふきのとうか、つくしんぼだと思っていました。ところが、時代が変われば、春一番に出てくるのが空き缶になったのでしょうか。

「河川敷地内にごみ等を投棄することは河川法等により禁せられます。絶対に捨てないでください」と看板が立ててあるのも無視して、勁め帰りの車の窓から鳥が飛んでいるかのように投げて走って行く車を見かけることもあります。

酒を飲んだら乗るなと言うように、飲んだら捨てるなと思ってみてもよいのではないでしょうか。

祝日に思う

国旗を掲げ有意義に活用しよう

横山九十九さん（陽向台団地・会社員・56歳）

終戦後、占領政策の一環として、国旗の掲揚が禁止されたことがあった。それも昭和二十四年に解除されたが、それ以来、国の祝日に国旗が各家庭の門前に掲げられるのが非常に少なくなったことは淋しい。

人によっては、過去の戦争の悲惨な思い出から軍国主義の復活と結びつけたり、思想・信条が異なるものもあるだろうが、自分の生まれた国の祝日に国旗を掲げて祝うくらいの心の豊かさは持ちたいものである。

しかも現在の祝日は、平和国家にふさわしい祝日である。「白地に赤く日の丸をそめた」日本の国旗は、日本人の心のよりどころである。この国旗を掲げ祝日制定の由来を考えながら、祝日を有意義に活用したいものである。

市民文芸

俳句

菊花展神域なれば輝ける　坪川桐太郎
ドライブや里の紅葉の限りなく　針貝　静男
菊作り山岳渓谷おもつくる　石田　豊実
参道の菊ほめながら立ちどまり　田中　昭一
伊夜彦に詣うでて一句菊の花　牛腸　七郎
落葉炊きあすの天気を祈りけり　桑原　平一
山茶花の白さを掃きし朝かな　佐野　竹子
たまゆらの腹から浸る紅葉宿　真保　清三
吟行はすすきも揺れねいい日和　須戸　義夫
里も山も紅葉している夕日かな　佐藤勇一郎

川柳

鏡台で母を呼んでる帯の位置　佐藤トミノ
風呂あがり鏡もあきれる腹の肉　織田　セツ
厚化粧鏡は嘘を透視する　竹石　甚五
還暦の白髪の陰で子が育ち　田村　恒夫
無駄骨を折る手に力入れて見る　今井　七郎
抜け切れぬ白髪を染めて若く見せ　山岡　フミ
ロマンスが芽を吹きそうな娘の電話　後藤まさの
薫風に誘い出されて汽車に乗る　西条　ムラ
母親を鑑に母となる決意　中村　尚治
定年の椅子へ冷たい風当り　吉川　彰
野次馬のきまぐれ軽く手を叩き　吉川　末吉
呉れる先言えぬ土産を一ツ買う　高橋祐四雄
ゴキブリを殺した手で盛る僕の飯　長井　徳市
法相の発言是か非か問う世論　米野　光雄
雷が風と一緒に冬はこぶ　岡村　清
嫉妬する男の顔はマンガです　大井　義雄

短歌

木漏れ日に映えて色増す柿の実を
かすかに揺する風通りゆく　中村　京